



Data

監督：滝田洋二郎
 脚本：那須真知子
 舞台演出：ケラリーノ・サンドロヴィッチ
 音楽：小椋佳
 出演：吉永小百合／佐藤浩市／阿部寛／堺雅人／篠原涼子／岸部一徳／中村雅俊／永島敏礼／笑福亭鶴瓶／高島礼子／安田顕／野間口徹／田中壮太郎／毎熊克哉／土屋慶太／阪本颯希／螢雪次朗

👁️👁️ みどころ

『北の零年』（05年）、『北のカナリアたち』（12年）に続く、「北の三部作」最終章たる本作の舞台は樺太。時代は昭和だ。『人間の條件』第5部、第6部やミュージカル『異国の丘』（01年）とも重なり合う、ソ連軍侵攻当時の緊迫感と、人々の悲しみ・苦しみをしっかり感じたい。

吉永小百合は30代後半と60代後半の姿を交差させながら登場するが、残念ながらそこには少し無理がある。しかし、それを補いカバーするのが、次男・修二郎役の堺雅人や、佐藤浩市、岸部一徳、中村雅俊たちの助演陣だ。

母と息子の思い出の地を巡る旅の深みと重みは『砂の器』（74年）に見た父子の巡礼の旅の深みと重みには及ばないが、それなりの説得力はある。また、ラストに待ち受けるケラリーノ・サンドロヴィッチの舞台演出と、小椋佳作詞・作曲の『花、蘭の時』という主題曲をしっかりと味わいながら、吉永小百合120本目の記念作をそれなりに楽しみたい。



■□■北海道命名150年！吉永小百合120本！■□■

今年2018年は明治維新150年の年にあたるため、NHK大河ドラマでは『西郷どん（せごどん）』が放映されている。また、今年2018年は、「北海道」と命名されてから150年を迎えるらしい。そんな年にちなんで、滝田洋二郎監督が吉永小百合とタッグを組んで、『北の零年』（05年）（『シネマルーム7』268頁参照）、『北のカナリアたち』（12年）（『シネマルーム30』222頁）に続いて、「北の三部作」の最終章たる本作に挑戦！ もっとも、「北の三部作」はたまたま北海道を舞台にした映画に吉永小百合が主演したため

勝手にそう名づけているだけで、この3作に共通するテーマがあるわけではない。

他方、1959年に『朝を呼ぶ口笛』でデビューした吉永小百合は、本作が120本目の記念作となる。100本目にあたる市川崑監督の『つる—鶴—』の製作公開が1998年だから、吉永小百合は人生後半の44歳から73歳までの約30年間に20本に出演したことになる。私が中学、高校時代に観ていた吉永小百合・浜田光夫のゴールデンコンピの頃は、年間10本以上（ちなみに、1961年には年間15本、1962年には年間10本、1963年には年間11本、1964年には年間9本）に出演していたから、その量はすごい。

私の印象では、92作目の『動乱』（80年）や93作目の『海峡』（82年）での高倉健との共演を経て吉永小百合は大きく変わったし、近時は112作目の『母べえ』（07年）（『シネマルーム18』236頁参照）や114作目の『おとうと』（09年）（『シネマルーム24』105頁参照）での山田洋次監督とのタッグはいかにも息がピッタリ！しかし、滝田洋二郎監督と初タッグを組んだ本作の出来は？そこではケラリーノ・サンドロヴィッチが演出する舞台シーンもふんだんに盛り込まれているそうだから、劇団四季が「昭和の歴史三部作」の1つとして作ったミュージカル『異国の丘』（01年初演）のような趣も感じられるのではないかと大いに期待！

■□ 『祭りTV！吉永小百合祭り』から約10年！ □■

少し自慢話になるが、私は2008年10月31日～11月27日に放映されたスカパー『祭りTV！吉永小百合祭り』に出演した。これは吉永小百合主演の『まぼたい』こと『まぼろしの邪馬台国』（08年）（『シネマルーム21』74頁参照）（113本目）が08年11月に公開されるのを記念して企画されたものだが、そこに浜田光夫と並んで私がゲスト出演したのは、何を隠そう、私が中学生時代からの熱烈な「サユリスト」だったためだ。

収録日の10月16日、私は東京中野にあるスタジオで所要時間約3時間の収録に臨んだが、事前に私が準備したのは、①『キューポラのある街』『愛と死をみつめて』『細雪』『おはん』など7本のストーリー等についてビデオを観ての再チェック、②その見どころ解説や求められるコメントの準備、そして③過去の出演作品全113本（ナレーション出演の2作を除く）の分析などの多種多様なものだった。それから約10年。吉永小百合もずいぶん年をとったことを実感せざるをえないが、さて本作の出来は・・・？

■□ タイトルの意味は？樺太はどこに？ □■

明治時代を描いた『北の零年』の舞台は静内、平成の時代を描いた『北のカナリアたち』の舞台は礼文島だった。それに対し、昭和の時代を描いた本作の舞台は樺太。そうは言っても、今の日本人にはわからない人も多いだろうが、そこはソ連にサハリンと呼ばれていた

る島で、戦前は北半分はソ連の、南半分は日本の領土だった。『異国の丘』は吉田正が作曲した名曲『異国の丘』をテーマとしたオリジナルのミュージカルだが、敗戦後ソ連軍によってシベリアに抑留されていた吉田正たち日本軍兵士の実話にもとづく悲しい物語が含まれていた。また、『人間の条件』（59年～61年）全6部作の第5部「死の脱出篇」第6部「曠野の彷徨篇」では敗戦後、梶上等兵が愛妻・美千子の待つ日本に何としても帰るんだという脱出記が大いなる迫力の中で描かれていた。

しかして、本作は太平洋戦争下の1945年の樺太。西海岸の恵須取で大きな製材所を営む江蓮家の庭に、江蓮てつ（吉永小百合）が大事に育てていた桜が花開くところから物語はスタートする。これは、夫の徳次郎（阿部寛）が本土から持ち込んだ桜の種を、てつが育て上げたものだが、本当に樺太で桜が咲くのか？また、8月にはソ連が南樺太への侵攻を開始したから、てつはまだ幼い長男と次男を連れて北海道への脱出を図り、徳次郎はソ連軍を迎え撃つため出征することに・・・。

■□■1945年と1971年。それを1人の女優が！■□■

本作は吉永小百合120本目の記念大作として大々的に事前宣伝されていたが、30代後半の年齢で登場する1945年から、成長した次男・修二郎（堺雅人）と再会する1971年の60代後半までの時代を吉永小百合が1人で演じるのははもとも無理がある。だって、本作のメインはあの幼かった修二郎が、18歳で網走を出て単身でアメリカに渡り、米国企業、ホットドッグストア「ミネソタ24」の日本社長として帰国した後、1971年に老いた母親でつに再会するというストーリーだから、1945年から1971年までの21年という年月は長く、重い。また、そもそも冒頭には、阿部寛と吉永小百合が夫婦役として登場するのも、2人の年の差を考えるといかにも違和感が強い・・・。

さらに、若い頃はいかに可愛かったとはいえ、吉永小百合は1945年生まれだから、すでに73歳。日活で吉永小百合の少し先輩だったファニーフェイスの女優・浅丘ルリ子だって、『デン德拉』（11年）（『シネマルーム27』187頁参照）では「これぞ女優魂！」と私が絶賛したすごい老婆役に徹していたことを考えると、いくら吉永小百合でも30代後半の役はそもそも無理筋では・・・？とりわけ本作では、妻・江蓮真理（篠原涼子）の困惑にもかかわらず、今はずつに寄り添って生きていく決意を固めた修二郎と2人で思い出の地を訪れて歩く中盤のストーリーの中で、現在と過去を交差させるシーンがたくさん登場するため、その不自然さが浮き彫りになってしまう。

本作のハイライトは、てつが長男と次男を連れて樺太の大泊（現・コルサコフ）から北海道へ向かう疎開船の小笠原丸が、潜水艦の襲撃を受けて沈没する衝撃のシーンだが、その時のてつは30代後半。60代後半になり、修二郎と共に立つ声間（こえとい）の海岸でその遭難シーンを思い出し、突如長男の名前を呼びながら海の中に入っていき認知症気味の老婆でつは勇姿はそれなりにピッタリだが、海の中でもがきながら幼い長男の名前を

連呼する30代のでつ姿にはいささか無理感が・・・。

パンフレットには、「てつよそおい」と題して1945年の当時と、1971年当時のてつ、それぞれの姿を登場させており、そこではそれなりのおさまりがあふ。しかし、パンフレットにある1枚ずつの写真とスクリーン上の映像はやはり異なるもの。吉永小百合の120本目の記念作でこんなケチをつけてはダメなことはわかりつつ、ついそんな愚痴も・・・。

■□■戦後の仮設住宅と1971年の社長宅。その居心地は？■□■

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では、被災者のために大量の仮設住宅が建てられたが、復旧・復興が進むにつれて、その撤去・退去が進められた。しかして、長男を海の中で失った失意の中で修二郎だけを連れて網走に引き揚げてきたてつは、「江蓮食堂」を営みながら仮設住宅で暮らしていた。引き揚げてきたてつに關米屋の仕事を与え、生活の手助けをするなど何かと面倒を見た、關米の流通を仕切る男が、菅原信治（佐藤浩市）。また、てつたちの樺太時代からの友人で、徳次郎と国民義勇隊として戦地に赴き、戦後本土に戻ってからもてつをずっと見守った男が山岡和夫（岸辺一徳）だ。菅原とその助手・岩木（毎熊克哉）の2人がてつとの間で築いていく信頼関係は本作の物語に力強さを与えているが、山岡のてつに対する親切ぶりはどこかヘン。しかして、その事情は、ある時点で山岡の口から明らかにされるので、『異国の丘』で見た「シベリア抑留の悲劇」と重ね合わせながら、その秘話(?)をしっかりと考えたい。

さらに、本作には山田洋次監督の『母べえ』や『おとうと』等で「山田組」の常連になっている笑福亭鶴瓶が、てつと修二郎が旅の途中で立ち寄る居酒屋の主人として、また、高島礼子がかつて網走で暮らしていたてつの友人役としてチョイ役で出演しているので、それにも注目。さらに、かつて青春ドラマの旗頭だった中村雅俊が、真理の父親でミネソタ24の大株主としてミネソタ24日本1号店の視察にアメリカから札幌を訪れてくるので、それにも注目！そりゃ吉永小百合も年をとったのだから、中村雅俊も年をとったのは当然だ。札幌でミネソタ24日本1号店を成功させ、数年後に100店舗を達成するというサクセスストーリーには少し違和感があるが、まあこれについてもマクドナルドやモスバーガー等の現在までの成長ぶりと対比しながら、1970代の高度経済成長期の日本をしっかりと思い返したい。1971年に修二郎と再会したてつは、彼の要請によって網走の仮設住宅から札幌にある修二郎の社長宅に移ったが、さてその居心地は・・・？

■□■桜の美しさにうっとり！タイトルにも納得！■□■

私が邦画の歴代ダントツのベスト1に挙げるのは、野村芳太郎監督の『砂の器』（74年）。そこではある病気を持った父親と、後に有名な音楽家になる息子との「巡礼の旅」が悲しくも壮大なストーリーを形成していた。また、そこでは、松本清張の原作らしい「殺人犯

捜し」の推理モノとしての要素も強かったが、それ以上に人間とは？父子の絆とは？を深く考えさせられる名作だった。しかし、本作も中盤のメインストーリーは、認知症気味の母親とつと、次男・修二郎との「思い出の地を巡る2人旅」になるので、その「深み」と「重み」に注目！

当然、札幌の社長宅では何不自由ない生活ができるし、着る物、食べる物、何でも贅沢できる身分だから、つとがそれに満足できればそれでいいのだが、いかんせん今のつとにそんな欲はまったくない。そのため、自分が修二郎と真理との若夫婦に交じって生活すれば迷惑をかけるばかりだと考えたつとは一人網走へ帰ろうとしたが、すでに仮設住宅は撤去されていたから、つとはどこでどんな生活を・・・？本作のラストにはそのタイトルになっている「北の桜守」としてのつとの生活ぶりが登場するが、これはどうみても現実性が薄い。そこで本作ラストではそれを補う強力な手法として、ケラリーノ・サンドロヴィッチの舞台演出が登場するので、それに注目！

映画は何でもありの芸術だが、舞台はそれ以上に何でもありの芸術。樺太でも見事に桜の花を咲かせたのだから、1973年に「ある山小屋」で「北の桜守」として働いていたつとが、桜の花をいっぱい開かせていたのは当然。そして、そこには、あの時海の中で死んだはずの長男も、出征したままで帰らぬ人になったはずの夫も、満開の桜の下で待つつとのもとに戻ってくることに……。そこで合唱団と共につとの家族と一緒に歌う歌が、本作の主題歌である『花、闌の時』。「闌」を「たけなわ」と読むのは難しいが、「宴も闌ですが・・・」という挨拶の言葉はいつも聞いているから、その意味はわかるはず。また、その歌詞も小椋佳の作詞だけにすばらしいものだ。このように、本作ラストでは満開の桜の花の美しさにうっとり！また、『北の桜守』というタイトルにも納得！

2018（平成30）年3月20日記